

〈要約〉

ベンサム功利主義の方法論的基礎 (1)

The methodological foundation of Bentham's Utilitarianism (1)

板 井 広 明
Hiroaki Itai

本稿は『道徳と立法の諸原理序説』および『法一般論』において、当時支配的であったコモン・ロー体系を廃棄し、諸法典の編纂・制定というイギリス法理学上きわめて独自の主張を行なったベンサムの功利主義哲学の基本的構図を、テキスト内在的に素描した。

ベンサムの功利主義哲学の基本的枠組みである功利性の原理は、当時のブリテンにおける道徳哲学の問題関心（道徳の生成）とは大きく距離を置いて、客観性や帰結を重視して展開された「あるべき道徳」の模索であった。概算にとどまる幸福計算は単に量的関係としてではなく、対象である人々の境遇や性質を考慮すべきものであった点を明らかにしている。